

2021年 8月 1日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教「食卓から落ちるパン屑」 マタイによる福音書 15章21-28節 高橋彰

◆カナンのおんなの女の信仰

15 21 イエスはそこをたち、ティルスとシドン^{ちほう い}の地方に行かれた。22 すると、この地^{ち う}に生まれたカナン^{おんな}の女^{おんな}が出て来て、「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れ^{あわ}んでください。娘^{むすめ}が悪霊^{あくれい}にひどく苦しめられています」と叫んだ。23 しかし、イエスは何もお答え^{こた}にならなかった。そこで、弟子^{でし}たちが近寄^{ちかよ}って来て願^{ねが}った。「この女^{おんな}を追^おい払^{はら}ってください。叫^{さけ}びながらついて来^きますので。」24 イエスは、「わたしは、イスラエル^{いえ うしな}の家の失^{ひつじ}われた羊^{ひつじ}のところにしか遣^{つか}わされていない」とお答え^{こた}になった。25 しかし、女^{おんな}は来^きて、イエスの前^{まえ}にひれ伏^ふし、「主よ、どうかお助け^{しゆ}ください」と言^いった。26 イエスが、「子供^{こども}たちのパンを取^とって小犬^{こいぬ}にやっ^{こいぬ}てはいけ^{こた}ない」とお答え^{こた}になると、27 女^{おんな}は言^いった。「主よ、ごも^{しゆ}っともです。しかし、小犬^{こいぬ}も主人^{しゆじん}の食卓^{しょくたく}から落ち^おるパン屑^{くず}はいただくのです。」28 そ^こで、イエスはお答え^{こた}になった。「婦人^{ふじん}よ、あなたの信仰^{しんこう}は立^{りっ}派^ぱだ。あなたの願^{ねが}いどおりになるように。」そのとき、娘^{むすめ}の病^{びよう}気^きはいやされた。」

聖書 新共同訳(C) 日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

この前の箇所ではファリサイ派と律法学者たちがイエスに対して、弟子たちが食前に手を洗わないという非難をしたことから、清浄不浄が問題にされました。人を汚すのは外から入るもの(食べ物)ではなく、「心」の内から出る「言葉」であるとイエスは弟子たちに教えられました。そしてそれは、食べ物のことだけではなく、人間についてのことでもあると、弟子たちは悟らされていったのです。今日の箇所がマルコとマタイの福音書で続いて記されているのにはそうした意味があることに気がつかねばならないでしょう。ルカ使徒言行録でも、使徒10章でペトロとローマの百人隊長のコルネリウスとが会^あい^あう時に、ペトロはその直前に祈りの中で食べ物^のの^を見るのです。「神が清めたものを清くないなど言^いってはい^いならない」(使徒10:15)のです。「神は人を分け隔てな^さらない」という言葉は新約において数回記されますが、イエス・キリストにおいて示された福音において重要な意味を持つ言葉です。ユダヤ人だけでなく、異邦人にも、いやむしろ異邦人の方^{かた}にこそ神が積極^{きよく}的に働きかけ救いをもたらそうとされているということを知った弟子たちは、民族的、宗教的、社会的に隔てられていると考えていた境界線を^こえ^こて異邦人に福音を伝え、主の教会を造り上げていったのです。ただし、十字架以前のイエスご自身の宣教活動はどうだったのかと言えば、福音書では、ガリラヤ地方とエルサレムへの旅、その中でほぼユダヤの民に向けて語られなされたものがほとんどでありました。しかし、マタイ福音書においては、8章で百人隊長、そして15章のカナン人の女性の話が取り上げられています。ユダヤ人だけでなく、いやしと救い^{きうい}はもたらされ、しかも「言葉」によって遠隔地の病人が癒されています。これらはイエスの力や働きを伝えるばかりでなく、人の隔てを越えて全世界へと宣べ伝え、仕える教会のビジョンの指標になりました。

人と人が新たに出会うというのは喜びの広がりともなり、希望にもなります。一方で、新たな出会いは互いの相違を実感する緊張の時でもあります。今日の箇所ではイエスは群衆や敵対する人びとがいる場所から離れた北西の地域、外国人の領域と接している辺境の地域に退いたとあります。しかしそのイエスの許に、地元出身のカナン人の女性が助けを求めて来^きました。

名も記されない彼女は娘の病気の癒しを願います。「私を」憐れみ、お助けくださいとイエスに懇願します。娘の闘病は我が事と同じなのです。しかし弟子たちは「追^おい払^{はら}ってください」等^らと^ら言^いい、イエスもはじめは無^む応^{おう}答^{こた}でした。彼女は叫^{さけ}びながらイエスを追^おいます。4度のやりとりがなされます。イエスは非情に聞こえるように「イスラエル^{いえ うしな}の家の失^{ひつじ}われた羊^{ひつじ}のところにしか遣^{つか}わされていない」「子どもたちのパンを取^とって、小犬^{こいぬ}たちに投^なげ^なてやるのはよくない」などと、ひれ伏^ふし(マタイ2:11, 28:17)で懇願する女性につれない返答を続けます。確かに彼女は自分の思いと願いで突^つき^つ進^{しん}んできます。しかし、このように応答したイエスもまた、神の救いの宣教はまずユダヤ人に、イエスはそのため^{ため}に集中して前進しているかのようです。彼女を「小犬」とまで言^いいます。隔ての壁がある出会いでした。カナン人はイスラエルが追^おい^おし^して入植したパレスチナの先住民です。ご自分の民イスラエルへの偏重した思いと働きかけがあるとも見られます。その点が逆説的に顕にされます。イエスと3回の対話のやりとりをしながら、女性は「主よ」「ダビデの子よ」とユダヤの人びとのしかたで称号を唱え、遜った表現ではありながら、必死に食い下がります。「主よ、ごも^{しゆ}っともです。でも、小犬^{こいぬ}も主人^{しゆじん}の食卓^{しょくたく}から落ち^おるパン屑^{くず}はいただきます。」と。彼女の言葉は相手に対する謙遜^{けんそん}がありながら、願いをしっかりと持ち、そしてあきらめない。自分にはどうしようもなく、イエスに頼^{たの}る^るしか^{しか}ないという思いを、イエスは「あなたの信仰は大きい(立派だ)」と言^いわれました。そして「あなたの願い通りなるように」と語られた時、イエスとカナン^{おんな}の女性を隔てる境界線は超えられ、彼女の娘は病と悪霊の支配は打ち破られ癒されました。彼女は娘を思^{おも}うあまりに自分の思いに溢れてイエスに願^{ねが}いました。しかしイエスとの対話に^{こた}答^{こた}して心開かれます。イエスもまた彼女との対話を通してご自身の態度振る舞いを変えられ、彼女に向き合われました。そこに救いが実現しています。この話は、わたしたちにとっても「主を礼拝する」ことが虚しくなく、希望があることを思い起こさせてくれます。「求めなさい、そうすれば与えられる」方がわたしたちの主なる神だからです。